

# 浄覚撰『注般若波羅蜜多心経』の訳注研究

程 正

## (一) 浄覚撰『注般若波羅蜜多心経』について

浄覚撰『注般若波羅蜜多心経』(以下、『浄覚注』)(七七二年成立)は、現在知られている唐代で成立した禅僧による『心経』注釈の中では、唯一の成立年代がはっきりしているもので、北宗禅の禅思想や初期禅宗における『心経』に対する受容などを検討するのに、極めて重要な文献であるといえるよう。

この『浄覚注』を最初に紹介されたのは、向達による「西征小記」(『国学季刊』第七の一、一九五〇年)と題した論文の発表であるが、この論文が後に改訂され、『唐代長安と西域文明』(生活・読書・新知三聯書店、一九五七年)に収録された。向氏によれば、彼が一九三一年から一九三二年にわたって敦煌に赴き、敦煌の名士である任子宜氏所蔵の『浄覚注』の他に『菩提達摩南宗定是非論』、『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』、『六祖壇経』などを含む禅宗文献の連写本の

敦煌文献を発見したという。後になって判ったことではあるが、向氏がその時に『浄覚注』を手写した(以下、向達抄本)のである。

その一方、一九五四年に竺沙雅章氏が京都大学人文科学研究所蔵のスタイン蒐集敦煌資料のマイクロフィルムの中から、新たにS四五五六号の『浄覚注』(首欠)一種を発見し、それを「浄覚夾注般若波羅蜜多心経について」(『仏教史学』卷七の三、一九五八年)と題して、学会に報告された。

一九六一年に、呂澂氏が「敦煌写本唐釈浄覚(注)般若波羅蜜多心経(附説明)」(『現代仏学』、一九六一年)と題した論文を発表され、『浄覚注』の全文(以下、呂本)が初めて世に知られるようになった。呂氏が竺沙氏の研究成果を知らず、呂本の録文のすべてが向達抄本によったものとされる。その後、柳田聖山氏による『初期禅宗史書の研究』(法蔵館、一九六七年)が公刊され、『浄覚注』が「附録 資料の校注」の資料七として収録されている。呂本の存在を知らなかった

柳田氏が、向達抄本をさらに筆写したものを入手し、S四五五六号を底本に、向達抄本の筆写本を校本として、新たなテキスト（以下、柳田本）を作成し、さらに語注も付け加えた。

一方、向達抄本のオリジナルテキスト（以下、敦博本）は、その後長い間、その行方が知られないままであつたが、一九九〇年代に入ってから、敦煌県博物館に収蔵されていることがようやく判明した。これを受けて、中国社会科学学院の楊會文氏がこの敦博本を底本とし、S四五五六号と柳田氏の校訂本とを校合して、新たな校訂（以下、楊本）を行つた。その成果を「浄覚及其『注般若心經』与其校本」<sup>※1</sup>（『中華仏学学報』第六期、一九九三年）と題して発表された。さらに、敦博本の影印は、柳田聖山、椎名宏雄共編の『禪学典籍叢刊 別巻』（臨川書店、二〇〇二年）に収録され、大いに学界の注目を集めたのである。

本稿は、こうした先学の研究成果を踏まえて『浄覚注』本文の和訳と語注を試みたものである。なお、本稿は筆者のかつての指導教授である田中良昭先生の指導のもとで作成したものである。

※1その入手経緯については、柳田聖山『中国禅宗史書の研究』（法蔵館、一九六七年。これが後に『柳田聖山集 第六卷』として、二〇〇〇年に法蔵館より復刻された）、五九四頁を参照。

※2このほかに、方廣編輯『般若心経訳注集成』（上海古籍出版社、一九九四年）にも収録されている。

(二) 淨覚撰『注般若波羅蜜多心經』の訳注研究

テキスト：基本的には、柳田本を用いるが、和訳するために、テキストの本文を適宜に区分することにした。

注般若波羅蜜多心經

皇四從伯<sup>※1</sup> 中散大夫<sup>※2</sup> 行金州長史<sup>※3</sup> 李知非<sup>※4</sup> 略序

夫法身無象、応物以形、般若無知、对縁而照。其文省、無智亦無得、其理深、照見五蘊皆空。十二部經之宗、三世諸仏之母。

于時大唐京兆大安国寺沙門淨覚<sup>※10</sup>、俗姓韋、祖遺遙公<sup>※11</sup>之後也。先是「約六字不明」<sup>※12</sup> 荊州秀門人、復是洛州嵩山禪師<sup>※13</sup>足下、又是安州寿山曠大師<sup>※14</sup>

〔伝〕灯弟子。

古「禪訓」曰、「宋太祖之時、求那跋陀羅三藏<sup>※15</sup> 禪師、以楞伽伝灯、起自南天竺国、名曰南宗。次伝菩提達摩禪師、次伝可禪師、次伝絜禪師、次伝蘄州東山道信禪師、遠近咸称東山法門也。次伝忍大師、次伝秀禪師、道安禪師、曠禪師。

此三大師、同一師学、俱忍之弟子也。其大徳三十余年、居山学道、早聞正法、独得髻珠、益国利人、皆由般若波羅蜜而得道也。其曠大師所

淨覚撰『注般若波羅蜜多心經』の訳注研究(程)

般若波羅蜜多心經を注す

皇四從伯、中散大夫、金州に行ける長史、李知非の略序  
夫れ法身は象無きも、物に応ずるには形を以てし、般若は知無きも、縁に対すれば照らす。其の文は省にして、智も無く亦得ることも無く、其の理は深くして、五蘊は皆な空なりと照見す。十二部經の宗にして、三世諸仏の母なり。

時に大唐の京兆の大安国寺の沙門淨覚は、俗姓は韋、遺遙公を祖とするの後なり。先には是れ「約六字不明」<sup>※12</sup> 荊州秀の門人にして、復た是れ洛州嵩山禪師の足下、又た是れ安州寿山曠大師の「伝」灯の弟子なり。

古の「禪訓」に曰く、「宋の太祖の時、求那跋陀羅三藏禪師、楞伽を以て灯を伝え、南天竺国より起り、名づけて南宗と曰う」と。次に菩提達摩禪師に伝え、次に可禪師に伝え、次に絜禪師に伝え、次に蘄州東山の道信禪師に伝うるに、遠近咸な東山法門と称す。次に忍大師に伝え、次に秀禪師、道安禪師、曠禪師に伝う。

此の三大師は、同一の師に学び、具に(弘)忍の弟子なり。其の大徳(弘忍)は、三十余年、山に居て道を学び、早く正法を聞きて、独り髻珠を得、国を益し人を利するに、皆な般若波羅蜜に由りて道を得るなり。

持摩納袈裟、瓶・鉢・錫杖等、並留付囑淨覺禪師。比在兩京、広開禪法、王・公・道・俗、帰依者無數。

其禪師年二十三、去神龍元年、在懷州太行山、稠禪師以錫杖解虎鬪処修道、居此山注『金剛般若理鏡』一卷。其靈泉号名般若泉也。古今相伝、高欽時、稠禪師於太行山靈泉、見兩虎鬪争一鹿、以錫杖分之、兩虎伏地、不敢争也。稠禪師涅槃已後數百年、無人住持、靈泉涸竭、栢樹枯朽。自從大唐淨覺禪師、尋古賢之跡、再修葺禪宇、掃灑未經三日、涸泉為之涌出、朽栢為之再茂也。

後開元十五年、有金州註27司戸尹玄度、録事參軍鄭暹等、於漢水明珠之郡、請注『般若波羅蜜多心經』一卷、流通法界。有誦誦者、願依般若而得道也。知非有幸、每親承妙訣、諦觀奧義、玄門不可測量、昼夜受持、頗亦識其心海。

讚曰、「般若真諦、無得無為。湛然清淨、空無所依。」

其の曠大師の所持せる摩納の袈裟、瓶・鉢・錫杖等、並べて留めて淨覺禪師に付囑す。兩京に在るに比び、広く禪法を開くに、王・公・道・俗の帰依する者無數なり。

其の禪師（淨覺）は、年二十三にして、去る神龍元年（七〇五）に、懷州の太行山に在りて、稠禪師の錫杖を以て虎の鬪うを解せし処にて修道し、此の山に居りて『金剛般若理鏡』一卷を注す。其の靈泉は号して般若泉と名づくるなり。古今に相い伝うるは、高欽（北齊の高祖、四九六―五四七）の時、稠禪師、太行山の靈泉において、兩虎の一鹿を鬪い争うを見、錫杖を以て之を分つに、兩虎地に伏して、敢えて争わざるなり。稠禪師の涅槃せしより已後數百年、人の住持すること無く、靈泉は涸竭し、栢樹は枯朽せり。大唐の淨覺禪師、古賢の跡を尋ね、再び禪宇を修葺してより、掃灑して未だ三日を経ざるに、涸泉之が為に涌き出で、朽栢之が為に再び茂るなり。

後、開元十五年（七二七）、金州の司戸の尹玄度、録事參軍の鄭暹等、漢水明珠の郡において、『般若波羅蜜多心經』一卷を注し、法界に流通せんことを請う。誦誦する者有らば、般若に依りて得道することを願うなり。知非、幸有りて、毎に親しく妙訣を承け、奧義を諦觀するには、玄門は測量すべからざるも、昼夜に受持し、頗るに亦た其の心海を識れり。

讚じて曰く、「般若の真諦は、得ることも無く為すことも無し。湛然清淨にして、空にして依る所無し」と。

般若波羅蜜多心經

沙門釈淨覺注

般若有二種。一者文字般若、二者深淨般若。文字般若者、口説文伝。深淨般若者、心通默用。

觀自在菩薩。

菩薩西国之名、此云道心衆生也。自在者法身也。『華嚴經』云、「東方入正受、西方三昧起、西方入正受、東方三昧起、名為自在也。」

凡夫被諸法繫縛（繋縛）五蔭柱上、不得自在。菩薩内觀（観）四大五蔭、空無所有、而得自在。外觀十方国土、空不可見、而得自在。『肇』云、「法無有無之相、故無數於外。聖無有無之知、故無心於内。」若如此者、処有不有、無心於有有之場。居空不空、不在於空空之境。心淨不動、境淨不移。物我虚通、一切無礙。故言自在菩薩也。

行深般若波羅蜜多時。

時者、了了見仏性之時也。波羅蜜多、此云到

淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の訳注研究（程）

般若波羅蜜多心經

沙門の釈淨覺注す

「般若」に二種有り。一には文字般若、二には深淨般若なり。文字般若とは、口もて説き、文もて伝ふるなり。深淨般若とは、心もて通（か）わせ、黙もて用ずるなり。

觀自在菩薩。

「菩薩」とは、西国の名にして、此には道心の衆生と云う。「自在」とは法身なり。『華嚴經』に云く、「東方にて正受に入らば、西方にて三昧起り、西方にて正受に入らば、東方にて三昧起る。名づけて自在と為す」と。

凡夫は諸法によりて五蔭の柱の上に繫縛（けいばく）せられ、自在を得ず。菩薩は内には四大五蔭の空にして、有る所無きを觀て、自在を得。外には十方の国土の空にして見るべからざるを觀て、自在を得。『肇論』に云く、「法には有無の相無し、故に外に無數なり。聖には有無の知無し、故に内には無心なり」と。若し此の如くなれば、有に処して有ならず、有の有る場に於いても心無し。空に居りて空ならず、空の空なる境に於いても在らず。心は淨にして動ぜず、境も淨にして移らず。物と我とは虚通して、一切は無礙なり。故に「自在菩薩」といふなり。

行深般若波羅蜜多時。

「時」とは、了了として仏性を見るの時なり。「波羅蜜多」とは、此

彼岸。解脱之心也。般若、此云智慧也。行深者、行即無行、聖道空寂、深無涯際。

照見五蘊皆空。

『中論』云、「五蘊和合故、仮名為我、無有決定。如梁椳和合故有舍焉、離梁椳更無有別舍也。」故知、色如聚沫、受如水泡、想如陽炎、行如芭蕉、識如幻化。照則五蘊皆空、而得淨明三昧也。不照則四蛇共住、貪著無明窟宅也。如千年闇室裏、有瑠璃七宝、人亦不知。有惡鬼六賊、人亦不覺。灯光一照、闇尽而見長明。則水淨珠生、雲開月朗。

度一切苦厄。

度生死苦也。苦惱本自空、厄難非今有。五蘊若是有、輪廻三界苦。五蘊本來空、厄難從何有也。

舍利子、

仏為小菩薩、説人空也。『涅槃(經)』云、「寧

に彼岸に到れる解脱の心を云うなり。「般若」とは、此に智慧を云う。「行深」とは、行は即ち(行じて)行ずる無く、聖道は空寂なれば、深は涯際無し。

照見五蘊皆空。

『中論』に云く、「五蘊の和合するが故に、仮に名づけて我と為すも、決定して有ること無し。梁と椳の和合するが故に、舍有るも、梁と椳とを離れて、更に別に舍有ること無きが如し」と。故に知る、色は聚沫の如く、受は水泡の如く、想は陽炎の如く、行は芭蕉の如く、識は幻化の如し。「照」すれば、即ち「五蘊」は「皆」な「空」にして、淨明三昧を得。照せざれば、即ち四蛇と共に住し、無明の窟宅に貪著す。千年の闇室に、瑠璃の七宝有るを、人は亦た知らず。悪鬼の六賊有るを、人は亦た覺らざるが如し。灯光の一たび照らさば、闇、尽きて長明を見る。則ち、水浄らば、珠生じ、雲開かば、月朗らかなり。

度一切苦厄。

生死の苦を「度」するなり。苦惱は本より自ずから空にして、厄難も今有に非ず。五蘊若しこれ有らば、三界に輪廻する苦なり。五蘊は本来より空なれば、厄難も何に従りてか有なるや。

舍利子、

仏は小菩薩のために、人は空なるを説くなり。『涅槃(經)』に云く、

作心師、不師於心。」凡夫未到此者、要須開示、方可悟入。「舍利子」者、弟子也。舍利子母名舍利。從母得名故、言舍利子也。

色不異空、空不異色。

色凡夫見色也、空二乘見空也。「色不異空」、即色是空也。色即非色、除其有見也。「空不異色」、即空是色也。空即非空、除其無見也。故竜樹云、「即色以明空、離色更無空、即空以明色、離空更無色。」是以空外非色、色外非空、空色性同。故言「不異」、此一乘道。

色即是空、空即是色。

「色即是空」、非色外有空。「空即是色」、非空外有色。『大品』云、「即色是空、非色滅空。」是知得道之人、不以空分別色、知色本非色也。不以色分別空、知空本非空也。非色即是真色、非空即是真空。非空非色、即除其真色、非色非空、即除其真空。真俗並無、色空俱尽。非安立

「寧ろ心の師と作りて、心を師とせず」と。凡夫の未だ此に至らざるものには、要須開示すべし。まさに悟入すべし。「舍利子」とは、弟子なり。舍利子の母を舍利と名づく。母に従りて名を得るが故に、舍利子というなり。

色不異空、空不異色。

色とは、凡夫の色を見るなり。空とは、二乗の空を見るなり。「色は空に異ならず」とは、色そのものは即ち空なるなり。色は即ち色に非ずとは、其の有見を除くなり。「空は色に異ならず」とは、空そのものは即ち色なるなり。空は即ち空に非ずとは、其の無見を除くなり。故に竜樹云く、「即色は明らかに空なるを以て、色を離れて、更に空無し。即空は明らかに色なるを以て、空を離れて、更に色無し」と。是れを以て空の外には色なるに非ず、色の外には空なるに非ず、空と色との性は同じなり。故に「異ならず」といふ、此れ一乗の道なり。

色即是空、空即是色。

「色は即ち空なり」とは、色の外に空の有るに非ず。「空は即ち色なり」とは、空の外に色の有るに非ず。『大品』に云く、「即色は是れ空にして、色の滅して空なるに非ず」と。これを知りて道を得るの人は、空を以て色を分別せず、色は本より色に非ざるを知るなり。色を以て空を分別せず、空は本より空に非ざるを知るなり。色に非ざるは、即ち是れ真の色なり。空に非ざるは、即ち是れ真の空なり。空に非ず、色に非ずとは、

諦、即諸仏如来乗也。

受想行識、亦復如是。

領納為受、計著為想、所作為行、分別為識也。  
上明色空本同、受想行識亦何別也。

言空不異受想行識、受想行識不異空、空即是受想行識、受想行識即是空。亦不身外有空、亦不身滅後空。亦不說空為空、亦不觀空作空。空尚不見於空、受想行識、更何有也。積与空義共同、故云「亦復如是」。

舍利子、

仏は大菩薩、説法空也。若見有人、人執未<sub>レ</sub>尽。若見有法、法執未<sub>レ</sub>亡。人空法空、即無人無法。

是諸法空相。

謂諸法本空也。『安心論』<sup>※</sup>云、「過去仏説一切法、亦畢竟空。未來仏説一切法、亦畢竟空。現

即ちその真の色を除くなり。色に非ず、空に非ずとは、即ちその真の空を除くなり。真も俗も並べて無く、色も空も俱に尽く。安立に非ざる諦にして、即ち諸仏如来の乗なり。

受想行識、亦復如是。

領納を「受」と為し、計著を「想」と為し、所作を「行」と為し、分別を「識」と為すなり。上にて色と空とは本より同じきを明らかにしたり。受想行識も亦た何ぞ別ならんや。

空は受想行識に異ならず、受想行識も空に異ならずといえは、空即ち受想行識にして、受想行識は即ち空なり。亦た身の外に空の有らず、亦た身の滅して後に空ならず。亦た空を説きて空と為さず、亦た空を觀て空と作さず。空は尚お空を見ざれば、受想行識は更に何ぞあらん。積は空の義と共に同なり。故に「亦復た是の如し」と云う。

舍利子、

仏は大菩薩のために、法は空なるを説くなり。若し人を有ると見ば、人に執して未だ尽きず。若し法を有ると見ば、法に執して未だ亡ぜず。人も空にして法も空なれば、即ち人も無く法も無し。

是諸法空相。

諸法は本より空なりと謂う。『安心論』に云く、「過去仏は、一切の法は亦た畢竟空なりと説き、未來仏は、一切の法は亦た畢竟空なりと説き、



在仏説一切法、亦畢竟空。」<sup>※46</sup>空中尋鳥跡、雪雪擬余糧、実非有也。是故諸仏或説空、或説於不空。諸法実相中、無空無不空。是名「諸法空相」。

不生不滅。

本無今有、是名為生。已有還無、是名為滅也。是故因緣聚者非生。因緣散者非滅。『十二門論』云、「諸法不自生、亦不從他生。不共不無因。是故知無生。若法從緣生、是則無自性。若無自性者、云何有是法也。」故知諸法湛寂、不生不滅。

不垢不淨。

垢淨皆是心也。心本無心、誰垢誰淨。如人夢見明月宝珠、落在淤泥不淨、以水洗之。睡覺之後、珠本不入泥中、何曾有垢。元不水洗、何曾有淨。明珠本常淨也。是以妄即非妄、而妄本來無妄。真即非真、而真未曾不真也。故知垢即非垢、而垢本來無垢。淨即非淨、而淨本來常淨也。

現在仏は、一切の法は亦た畢竟空なりと説く」と。空中に鳥の跡を尋ぬるも、雪の雪を余りし糧に擬うるも、実には有るに非ず。是の故に、諸仏は或いは空と説き、或いは空ならざると説く。諸法の実相なる中には、空も無く、空ならざるも無し。是れは「諸法は空相なり」と名づく。

不生不滅。

本より無く、今に有る、是れを名づけて生となす。已に有りて、還りて無し、是れを名づけて滅と為す。是の故に、因と縁との聚まるとは、生に非ず。因と縁との散るとは、滅に非ず。『十二門論』に云く、「諸法は自より生ぜず、亦た他より生ぜず。共ならず、因無きに非ず。是の故に、無生なりと知る。若し法は縁従り生ぜば、是れ則ち自性無し。若し自性無くば、云何んがこの法有らん」と。故に諸法の湛寂にして、生ぜず滅せざるを知るなり。

不垢不淨。

垢も淨も皆な是れ心なり。心は本より無心なれば、誰か垢け誰か淨めん。人の夢に明月の宝珠の、淤泥に落在して不淨なれば、水を以てこれを洗うを見るが如し。睡りより覚むるの後、珠は本より泥中に入れざれば、何ぞ曾て垢有りや。元より水もて洗わざれば、何ぞ曾て淨有りや。明珠は本より常に淨なり。是れを以てせば、妄は即ち妄に非ず、而して妄は本より妄なることなし。真は即ち真に非ず、而して真は未だ曾て真ならざるや。故に知る、垢は即ち垢に非ず、而して垢は本より垢なるこ

となし。淨は即ち淨に非ず、而して淨は本より常に淨なることを。

不増不減。

如来法身、無有辺際。十地※50満足、法身亦不増。六道生死、法身亦不減。

是故空中。

不在内、不在外。即空無所依。是名「空中」。

無色無受想行識。

苾芻※50針花、心狂眼病也。空中若有針花、五蘊則不虛也。空中実無針花、受想行識、何曾有也。如鑊水※50覓字、画水求文、空不可見也。若見五蘊是有、則種々行生、若見五蘊是空、則恒沙業散也。

無眼耳鼻舌身意。

六根空不在内、即眼、耳、鼻、舌、身、意、本非有也。

不増不減。

如来の法身は、辺際有ること無し。十地を満足するも、法身は亦た増せず。六道に生死するも、法身は亦た減せず。

是故空中。

内にも在らず、外にも在らず。即ち空にして、依る所無し。是れを「空中」と名づく。

無色無受想行識。

苾芻の針花は、心の狂い、眼の病むなり。空中に若し針花有らば、五蘊は則ち虚しからず。空中に実には針花無くば、受想行識も、何ぞ曾て有らん。水を鑊※50で字を覓め、水に画※50きて文を求むるが如く、空にして見るべからず。若し五蘊、是れ有なりと見ば、則ち種々の行生じ、若し五蘊、是れ空なりと見ば、則ち恒沙の業散ずるなり。

無眼耳鼻舌身意。

六根は空にして、内に在らざれば、即ち眼、耳、鼻、舌、身、意は、本より有に非ず。

無色声香味触法。

六塵空不在外、即色、声、香、味、触、法、本来無也。

無眼界乃至無意識界。

六識空不在中間、即眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、更何有也。故知四大、五蘊、十八界各無自性。所以者何、堅執之心是地、身上骨肉是也。愛染之心是水、即血性是也。煩惱之性是火、即暖熱是也。攀緣、動轉是風、即氣息是也。未有四大、即眼耳鼻舌身意、空無自性。既有四大、即地水火風、空無他性。六根依四大而起、六塵依六識而生。根本尚自空無、枝葉從何而得有也。『維摩(經)』云、「四大無主、身亦無我。」

無無明亦無無明尽、乃至無老死亦無老死尽。

此謂十二因縁也。如薰香薰在衣中、即有香氣、善惡種子、薰在識中、即有生、老、病、死也。身雖謝滅、識種尚存、神道遊遊、名為中蘊。七七日已來、隨罪福業報、人天六道、而受生也。『俱舍論』云、「六道四生、皆有中蔭之身、由第

無色声香味触法。

六塵は空にして、外に在らざれば、即ち、色、声、香、味、触、法は、本来より無なり。

無眼界乃至無意識界。

六識は空にして、中間に在らざれば、即ち、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識も、更に何ぞ有らん。故に知る、四大、五蘊、十八界は、各おの自性無きことを。所以は何んとなれば、堅執の心は是れ地にして、身上的骨肉は是れ水にして、即ち血性は是れ水にして、煩惱の性は是れ火にして、即ち暖熱は是れ風にして、即ち氣息は是れ風にして、未だ四大有ならざれば、即ち眼耳鼻舌身意も、空にして自性無し。既に四大有ならば、即ち地水火風も空にして他性無し。六根は四大に依りて起り、六塵は六識に依りて生ず。根本の尚お自ら空無なれば、枝葉は何に從りてか有なるを得ん。『維摩(經)』に云く、「四大に主なし、身も亦た我無きなり」と。

無無明亦無無明尽、乃至無老死亦無老死尽。

此れは十二因縁を謂うなり。薰香の衣中に薰在せば、即ち香氣有るが如く、善惡の種子の識中に薰在せば、即ち生、老、病、死有るなり。身は謝滅すると雖も、識種は尚お存し、神道を遊遊せば、名づけて中蘊と爲す。七七日よりこのかた、罪福業の報いに隨いて、人天などの六道に生を受くるなり。『俱舍論』に云く、「六道の四生は、皆な中蔭の身有り

六意識起愛。所以受生也。」若如此者、無色界諸天、雖無麤色、細色仍有。雖無形質、中蔭不無。滅尽定中、識種由存、不免三界生死。十二因緣者、『法華(經)』云、「無明緣行、行緣識、識緣名色、名色緣六入、六入緣觸、觸緣受、受緣愛、愛緣取、取緣有、有緣生、生緣老死。」若知無明体空、十二因緣、本非有也。無明若有、無明即有尽期。無明本空、空無無明、亦無無明尽也。老死若有、即有老死之期。老死本空、空無老死、亦無老死尽也。即齊虚空、等法界、湛然閑曠、是十方淨土也。何処更有人天六道而受生也。故知、心生三界生、心滅三界滅也。『維摩(經)』云、「欲得淨土、當淨其心。隨其心淨、即仏土淨。」此空破緣覺妄想十二因緣之所見也。

無苦集滅道。

四諦者、苦、集、滅、道是也。以現在四大、五蘊、為苦諦、以過去無明種子、為集諦、以觀苦斷集滅未來生死、為滅諦、以四禪八定、為道

て、第六意識によりて愛を起こす。所以に生を受くるなり」と。若しかくの如くなれば、無色界の諸天は、麤色無きと雖も、細色は尚お有り。形質無きと雖も、中蔭は無からず。滅尽定の中にも、識種猶お存すれば、三界の生死を免れず。十二因緣とは、『法華(經)』に云く、「無明は行により、行は識により、識は名色により、名色は六入により、六入は触により、触は受により、受は愛により、愛は取により、取は有により、有は生により、生は老死による」と。若し無明の体の空なるを知らば、十二因緣は本より有に非ず。無明若し有らば、無明は即ち尽くる期有り。無明は本より空なれば、空には無明も無く、亦た無明の尽くることも無きなり。老死若し有らば、即ち老死の期有り。老死は本より空なれば、空には老死も無く、亦た老死の尽くることも無きなり。即ち虚空に齊しく、法界にも等し。湛然として閑曠なれば、是れ十方の淨土なり。何れの処にか更に人天などの六道ありて生を受けん。故に知る、(心、生ずれば三界も生じ、心、滅すれば三界も滅す)と。『維摩(經)』に云く、「淨土を得んと欲せば、まさにその心を淨むべし。その心の淨まるに隨いて、即ち仏土の淨まるなり」と。此れ緣覺の妄想せる十二因緣の所見を破するなり。

無苦集滅道。

四諦とは、苦、集、滅、道これなり。現在の四大、五蘊を以て苦諦と為し、過去の無明の種子を以て集諦と為し、苦を觀じ、集を斷じ、未來の生死を滅するを以て滅諦と為し、四禪・八定を以て道諦と為す。此れ

諦。此皆世俗而説也。若解時、苦集本空、識龜毛之不有、滅道不実、了兎角之元無。即四諦本空、空無四諦。此空破声聞妄想四諦生滅之見也。

無智亦無得。

此明十地菩薩也。十地者、歡喜、離垢、明、炎、難勝、現前、遠行、不動、善惠、法雲也。智是仏智、得即道也。聖道冲虚、非智所測、法身湛寂、無得無為。以有六道・四生、權設三乘・十地也。故言、「渴鹿逐陽炎、実非水也。遠看似水、近則還無。」画餅充飢、説食得飽、亦何有也。即三乘・十地本空、空即実無三乘・十地。此空破菩薩妄想三乘・十地之見也。

以無所得故。

有所得、煩惱熾然。無所得、涅槃清涼。菩薩得虚空三昧、以無所得而得也。若如此者、乘即非乘、地何所地也。即羊車・鹿車・大牛之車、十地・六波羅蜜、空無所得也。

は皆な世俗にして説くことなり。若し解する時、苦と集は本より空にして、龜毛の有らざるを識り、滅と道は実ならず、兎角の元より無きを了ず。即ち四諦は本より空にして、空なれば四諦無し。此れ声聞の妄想せる四諦の生滅の見を破するなり。

無智亦無得。

此れは十地の菩薩を明らかにするなり。十地とは、歡喜、離垢、明、炎、難勝、現前、遠行、不動、善惠、法雲なり。智は是れ仏の智にして、得は即ち道なり。聖道は冲虚にして、智もて測る所に非ず。法身は湛寂にして、得ることも無く、為すことも無し。六道・四生有るを以て、權に三乘・十地を設く。故に言わく、「渴鹿は陽炎を逐うも、実には水にあらず。遠くより看ば水に似たるも、近づかば則ち還無し」と。画餅もて飢えを充し、説食もて飽を得るは、亦た何んぞ有らん。即ち三乘・十地は本より空なり。空なれば、即ち実には三乘・十地は無し。此の空もて菩薩の妄想せる三乘・十地の見を破するなり。

以無所得故。

有所得ならば、煩惱の熾然たるなり。無所得ならば、涅槃の清涼たるなり。菩薩の虚空三昧を得るは、得る所無きを以て得るなり。若しかくの如くならば、乘は即ち乘に非ず、地は何の所か地たらん。即ち羊車も・鹿車・大牛の車も、十地・六波羅蜜も、空にして得る所無し。

菩提薩埵。

西国名菩提質帝薩埵。此云菩提是道、質帝是心、薩埵是衆生。即道心衆生也。翻訳省略、直言菩薩。

依般若波羅蜜多故。

依般若、空無所得也。大象無形、大音希声、道隱無名也。

心無罣礙。

若見仏取相、即被仏礙也。若見法取法、即被法礙。若見人得名聞・利養、衆皆心動、即被人礙。何況作諸惡業也。若了内空、即不被六根之繫縛、若了外空、即不被六塵之障礙。人空・法空、即無罣礙也。『維摩經』云、「達諸法相無罣礙、稽首如空無所依。」

無罣礙故、無有恐怖。

了生即是無生法、非離生法有無生法。故無有恐怖也。賢護云、「心有想念、便成生死。心無想念、究竟涅槃也。」是故、恐怖者、如大雷・

菩提薩埵。

西国には、菩提質帝薩埵と名づけ、此こには、菩提は是れ道、質帝は是れ心、薩埵は是れ衆生にして、即ち道心衆生なりと云う。翻訳は省略し、直に菩薩と言う。

依般若波羅蜜多故。

般若に依るとは、空にして得る所無し。大象は形無く、大音は声希く、道隠れて名無し。

心無罣礙。

若し仏を見て相を取らば、即ち仏に礙えらる。若し法を見て法を取らば、即ち法に礙えらる。若し人の名聞・利養を得ることを見て、衆皆に心の動かば、即ち人に礙えらる。何にいわんや諸もろの惡業を作すをや。若し内の空を了れば、即ち六根の繫縛を被らず、若し外の空を了れば、即ち六塵の障礙を被らず。人空・法空なれば、即ち罣礙無し。『維摩經』に云く、「諸もろの法相に達すれば、罣礙無し、稽首するは、空にして依る所無きが如くに」と。

無罣礙故、無有恐怖。

生を了れば、即ち無生の法なり。生を離れて無生の法有るに非ず。故に恐怖有ること無し。賢護の云く、「心に想念有らば、便ち生死と成る。心に想念無くば、究竟の涅槃なり」と。是の故に、恐怖とは、大雷・霹

霹靂之時、蟻蟻小虫悶絶而死、大鵬之鳥、鼓翼而舞。声聞・縁覚、聞説身中自証道果、而生恐怖、不信正法也。菩薩摩訶薩、行住坐臥、普現色身三昧、得無礙解脫。故「無有恐怖」。

遠離顛倒夢想。

身外覓仏為顛、著空邪見為倒、世間生死為夢、趣向涅槃為想、不著兩辺為遠、不住中間為離。捨生死外覓菩提、棄煩惱別求淨土、如逃形避影、軫益身疲、嫌跡遠藏、弥加脚倦。欲得住影、靜坐安身、欲得滅跡、無過息足也。是故、顛倒者、或落天魔・神鬼法、知他人家好惡事也。或落外道一・異、俱・不俱邪見法也。故知迷猿捉水月、狂犬逐雷声、皆是顛倒、当須遠離也。若知五蘊是円淨明珠、即朝聞道夕死可矣。『楞伽(經)』云、「先聖所知、転相伝受也。」

究竟涅槃。

対生死説涅槃、対涅槃説生死。若無生死可生死、亦非涅槃可涅槃、是名為究竟也。所以者何、

浄覚撰『注般若波羅蜜多心経』の訳注研究(程)

霹靂の時に、蟻蟻の小虫は悶絶して死し、大鵬の鳥は翼を鼓みうちて舞うが如し。声聞・縁覚は、身の中に自ら道果を証するを聞説きて、恐怖を生じ、正法を信ぜざるなり。菩薩摩訶薩は、行住坐臥にて普く色身三昧を現じ、無礙の解脫を得。故に恐怖有ること無し。

遠離顛倒夢想。

身の外に仏を覓むるを顛とし、空に著する邪見を倒とし、世間の生死を夢とし、涅槃へ趣向を想とし、兩辺に著せざるを遠とし、中間に住らざるを離とす。生死を捨てて外に菩提を覓め、煩惱を棄てて別に淨土を求むるは、形を逃れて影を避けんとし、軫身の疲れを益し、跡を嫌いて遠く藏さんとし、弥いよ脚の倦れを加うるが如し。影を住めるを得んと欲せば、静坐して身を安じ、跡を滅するを得んと欲せば、足を息むるに過ぐるなし。是の故に、顛倒とは、或いは天魔・神鬼の法に落ち、他人の家の好惡の事を知る。或いは外道の一と異、俱と不俱の邪見の法に落つるなり。故に知る、迷猿の水月を捉えんとし、狂犬の雷声を逐うは、皆な顛倒なれば、当須く遠離すべしと。若し五蘊の円淨の明珠なるを知らば、即ち朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。『楞伽(經)』に云く、「先聖の知る所、転相い伝受す」と。

究竟涅槃。

生死に対して涅槃を説き、涅槃に対して生死を説く。若し生死の生死とすべき無く、亦た涅槃の涅槃とすべきに非らざれば、是れを名づけて

生死性即是涅槃、名別体不別。如火即熱、如水即冷、生死即是清涼也。故知形影本同、聲響何別。鏡像一也。『禪偈』云、「捨木橫無火、背水水難成。」虛空法界、本來湛寂。是名為究竟。

三世諸仏。

化身説有三世、真仏即前後無際。杜正倫碑云、「真如性淨、非三際之有殊、正覺道成、無一法可得也。」

依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

西国名阿耨多羅三藐三菩提、此云無上正遍知正道。依般若真理、照見無上之心、畢竟空寂、而建立法界也。所以者何、外道斷空、二乘偏空、仏於第一義空中、行於万行、得菩提道也。『疏』云、「法身清淨、猶空中之月、報身虛仮、若水中之像。水中之像、無体可見、推其本体、即空中之月。報身虛仮、無実可觀。尋其本実、即清淨法身也。」

究竟と為す。所以はいかんとなれば、生死の性は即ち涅槃にして、名は別なるも体は別ならず。火は即ち熱きが如く、水は即ち冷たきが如く、生死は即ち清涼の処なり。故に知る、形と影は本より同じにして、声と響は何んぞ別ならん。鏡と像は一なりと。『禪偈』に云く、「木を捨つれば、横火無く、水に背かば、氷の成り難し」と。虚空なる法界は、本来より湛寂なり。これを名づけて究竟と為す。

三世諸仏。

化身は三世有りと説くも、真仏は即ち前後に際なし。杜正倫の碑に云く、「真如の性は淨にして、三際の殊なり有るに非ず。正覺の道成らば、一法の得べき(もの)無し」と。

依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

西国には阿耨多羅三藐三菩提と名づけ、此こには無上正遍知正道と云う。般若の真理に依りて、無上の心を照見せば、畢竟空寂にして、法界を建立するなり。所以はいかんとなれば、外道は空を断じ、二乗は空に偏り、仏は第一義の空の中に於いて、万行を行じて、菩提道を得ればなり。『疏』に云く、「法身の清淨なるは、猶お空中の月のごとく、報身の虚仮なるは、水中の像の若し。水中の像は、体として見るべき無く、其の本体を推すれば、即ち空中の月なり。報身の虚仮なるは、実として観るべき無し。其の本実を尋ぬれば、即ち清淨の法身なり」と。



故知般若羅蜜多、是大神呪、是大明呪。

以般若神力、洗滌四大・五蘊、世間一切煩惱、悉皆蕩盡、歸清淨心海。豈非神呪也。此乃寂中常用、必須建立三乘・十地、行於万行也。用中常寂、三乘還是一乘、十地本歸一地、万行同於一行。只恐以櫛出櫛、櫛不脫也。故知、得魚忘筌、得兔忘蹄、得意忘言也。即布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智惠、行六波羅蜜、而無所行。心灯普照、故曰「大明」也。『勝天王經』云、「總持無文字、文字顯總持。般若大悲力、離言文字說也。」

是無上呪。

仏性は豎通三界、横亘十方。住最上法身、更無勝者。故曰「無上」也。

是無等等呪。

聖道通同、無有限量。廣大如法界、究竟如虚空。三賢・十聖、不可比量。故云「無等等」也。

故知般若羅蜜多、是大神呪、是大明呪。

般若の神力を以て、四大・五蘊を洗滌せば、世間の一切の煩惱は、悉く皆な蕩尽し、清淨の心海に歸す。豈に神呪に非ざらんや。此れ乃ち寂中にて常に用ずれば、必須す三乘・十地を建立し、万行を行す。用中に常に寂なれば、三乘は還た一乘にして、十地は本より一地に歸し、万行は一行と同ず。只だ櫛を以て櫛を出ださんとするに、櫛の脱せられざるを恐る。故に知る、魚を得れば筌を忘れ、兔を得れば蹄を忘れ、意を得れば言を忘ると。即ち、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智惠もて六波羅蜜を行じ、而して行ずる所無し。心灯の普く照らす、故に「大明」と曰うなり。『勝天王經』に云く、「總持に文字無くも、文字は總持を顯す。般若の大悲力は、言・文字を離れて説く」と。

是無上呪。

仏性は豎に三界に通じ、横に十方に亘る。最上の法身に住りて、さらに勝る者無し。故に「無上」と曰うなり。

是無等等呪。

聖なる道は通同にして、限量有ること無し。廣大なること法界の如く、究竟なること虚空の如し。三賢・十聖は比量すべからず。故に「無等等」と云うなり。

能除一切苦、真実不虛。

般若冲寂、煩惱永息。道無涯際、能除衆苦。是故、動念（動）即魔網、不動是法印也。

故說般若波羅蜜多呪、即說呪曰。

前以般若為呪、転煩惱而作菩提。後以般若為呪、摧惡魔而成正念。故智以養神（養）、呪除魍魎、受持誦誦、罪滅福生。信之者早入道流（道）、悟之者高登仏地也。

揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提莎婆訶。

心は仏心、非凡夫所解。智は仏智、非世俗所知。經は仏經、非群言所說。呪は仏呪、非聰惠者所伝。即不可測量、聊申偈曰、「迷時三界有、悟即十方空。欲知成仏処、会是淨心中。」当自内求、莫外馳騁（馳騁）。

般若波羅蜜多心經一卷

能除一切苦、真実不虛。

般若の冲寂なれば、煩惱は永く息み、道は涯際無くば、能く衆もろの苦を除く。是の故に、念を動かさば、即ち魔網にして、動かさざれば、是れ法印なり。

故說般若波羅蜜多呪、即說呪曰。

前には般若を以て呪と為さば、煩惱を転じて菩提と作せり。後には般若を以て呪と為さば、惡魔を摧（はら）て正念と成す。故に智を以て神を養い、呪もて魍魎を除き、受持し誦誦せば、罪は滅し福は生ず。これを信ずるものは早く道流に入り、これを悟るものは高く仏地に登るなり。

揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提莎婆訶。

心は是れ仏心にして、凡夫の解する所に非ず。智は是れ仏智にして、世俗の知る所に非ず。經は是れ仏經にして、群言（群）もて説く所に非ず。呪は是れ仏呪にして、聰惠の者の伝うる所に非ず。既に測量すべからざれば、聊か偈を申て曰わんに、「迷う時は三界は有にして、悟らば即ち十方は空なり。成仏の処を知らんと欲せば、会是淨心（淨心）の中ならん」と。当に自ら内に求めて、外に馳騁することなかるべし。

般若波羅蜜多心經一卷

遺法比丘光範（註）、幸於末代、獲遇真詮（註）。伏睹經明明、兼認注文了了。授之滑汭（註）、藏保篋箱。或一披尋、即喜頂荷（註）。旋忘二執（註）、潛曉三空。寔衆法之源、乃諸仏之母。無価大宝、今喜遇之。苟自利而不濟他、即滯理而成悞法。今即命工彫印、永冀流通。凡（以下欠）

遺法の比丘光範は、幸いに末代に、真詮（註）に遇うことを獲（う）。伏して経意の明明なるを睹（み）、兼ねて注文の了了たることを認む。之れを滑汭（註）にて授け、篋箱に蔵保せり。或るとき一たび披尋せるに、即ち喜びて頂荷す。旋（ま）ち二執を忘れ、潜かに三空を曉（あきら）む。寔に衆法の源にして、乃ち諸仏の母なり。無価の大宝にして、今、これに遇うを喜ぶ。苟も自ら利して、他を濟わず、即ち理に滯りて、法悞（む）むことを成す。今即ち工に命じて印せしめ、永く流通せんことを冀（こゝろ）う。凡（以下欠）

### 注記

- ※1 皇四從伯……皇は唐の玄宗のことで、從伯は、父より年上の兄弟のことを指すから、玄宗の父である睿宗（高宗の第八子）の兄弟、すなわち高宗の四番目の息子にあたる人物であると思われる。
- ※2 中散大夫……秦の九卿の一つにあたる郎中令（天子の近侍の高級官吏）の属官の官位として始まり、唐代では、文人の階位の正五品の実権のない散官である。
- ※3 金州……陝西省安康県の西北地方のこと。
- ※4 長史……戦国時代の秦に始まった官吏の名で、唐代では、行政地区の幕僚長に相当する高級官吏のこと。
- ※5 李知非……伝記未詳。
- ※6 法身無象、云々……僧肇の「肇論」「涅槃無名論」の位体第三に、經典の引用として、「経曰、法身無象、応物而形、般若無知、対縁而照。」(T15-156)とある。經典名は不詳。
- ※7 照見五蘊皆空……『般若心経』の句。
- ※8 五蘊……色、受、想、行、識の五つ。

浄覚撰『注般若波羅蜜多心経』の訳注研究（程）

※9 十二部経之宗、云々……弘忍のものとされる『最上乘論』の句。「守心第一。此守心者、乃是涅槃之根本入道之要門、十二部経之宗三世諸仏之祖。」(T9-3710)

※10 浄覚……浄覚（六八三〜七五〇？）は、唐の中宗の韋皇后の弟とされ、五祖弘忍の弟子にあたる神秀、慧安、玄蹟の三人に参侍し、玄蹟の法を嗣いだ。七〇五年に『金剛般若理鏡』一卷を著わしたとされるが、現存しない。また、玄蹟の『楞伽人法志』（現存せず）に基づいて、北宗禅の史書である『楞伽師資記』（七一三〜七一六）を著わし、また七二七年に『注般若波羅蜜多心経』を著わした。晩年は、有名な長安の大安国寺の住持となつて終つたようである。現存する浄覚の伝記として、『楞伽師資記』巻首の自序、『注般若波羅蜜多心経』巻首の李知非の略序、王維の『大唐大安国寺故大德浄覚師碑銘』の三種がある。

※11 道遥公……北周の韋叟（五〇二〜五七八）のこと。韋叟が京兆杜陵（現在の西安市南）の人で、北周の名將、韋孝寛の兄。周の明帝より道遥公の号を贈られ、更に周の武帝に釈、道、儒の三教の優劣を

聞かれ、『三教序』を著わして三教帰一の旨を奏上したという。『周書』卷三二の列伝第三三、『北史』卷六四の列伝第五二に伝記がある。

※12 荊州秀……五祖弘忍の十大弟子の一人で、大通神秀(六〇六?〜七〇六)のこと。神秀が則天武后に招かれて入内する前に長い間荊州玉泉寺にいたことから、荊州秀と呼ばれたであろう。

※13 洛州嵩山禪師……五祖弘忍の十大弟子の一人で、嵩山慧安(五八二〜七〇九)のこと。

※14 安州寿山蹟大師……五祖弘忍の十大弟子の一人で、玄蹟のこと。

※15 古禅訓……出所未詳であるが、同じく浄覚の撰した『楞伽師資記』「求那跋陀羅章」には、「王公道俗、請開禅訓。跋陀(=求那跋陀羅)未善宋言有愧、即夕夢人以劍易首。於是就開禅訓。」(柳田聖山「初期の禅史I」(禅の語録2)、筑摩書房、一九七一年、九三頁)とあり、また七言八句からなる『太行山浄覚禅師開心勸導禅訓』(柳田聖山前掲書、三四頁)と呼ばれる敦煌文献もある。

※16 求那跋陀羅三三藏禅師……求那跋陀羅については、古く『出三藏記集』卷十四、『高僧伝』卷三に伝記があり、『歴代三寶記』卷一〇、『大唐内典録』卷四に彼の訳したとされる經典名と略伝がある。彼が訳した經典の中で、後世に最も影響を及ぼしたのは、『楞伽經』(四卷)と『勝鬘經』である。三藏とは、經、律、論の三分野とも(すぐれた法師のことをいうが、ここで三藏禅師とするのは、經、律、論ともすぐれた僧と認められたと同時に、インドから中国に禅法を伝えた禅者であるという認識が、浄覚一派に強かったことを示している)。

※17 楞伽伝灯……『楞伽經』(四卷)の仏法を、代々伝承すること。伝灯とは、仏の正法を灯火にたとえて、それを伝えること。『大智度論』卷一〇〇には、「所以囑累者為不令法滅故。汝当教化弟子。弟子復教余人、展転相教。譬如一灯復然(=燃)余灯、其明転多。莫

作最後断種人者。」(T29-756b)と云々、『達磨多羅禅經』卷上には、「諸持法者、以此慧灯、次第传授。」(T15-301c)がある。伝灯という用例は、道宣の『続高僧伝』には、三〇箇所にのぼり、『楞伽師資記』では、伝灯が、禅宗独自の立場を示すものとして確立された。

※18 南宗……求那跋陀羅の訳した『楞伽經』(四卷)を伝承する一派が、南天竺国からより発生したことから呼ばれたもので、『古禅訓』の内容の一部とされる。

※19 蕪州……湖北省の黄梅県の地名。

※20 東山法門……ここでは道信の禅法を東山法門というが、実際は四祖道信が蕪州雙峰山に住し、五祖弘忍が雙峰山の東の憑茂山に移ったことから、この両者の禅法を合わせて東山法門と呼ぶ。

※21 警珠……仏の正法の譬え。法華七喻の一つ警珠喻として知られ、『法華經』安樂行品には、転輪王が諸国を討伐するに際して、諸兵士のうち最も功勞のあった者には、自分の髻の中にある珠を与えたことが説かれる。(T9-386c参照)

※22 其蹟大師所持摩納袈裟、云々……浄覚が師の玄蹟より摩納の袈裟、瓶、鉢、錫杖などを附囑されたとするこの記事は、後の禅宗伝衣説の起源として注目される。伝衣説は、荷沢神会が従来『楞伽伝灯説』に對抗するために、仕立て上げたもので、神会は、慧能が弘忍から袈裟を伝授されたといひ、しかもそれが正法の証として菩提達摩から代々伝えられたものであることを述べ、袈裟の伝承のない神秀一派を傍系として退け、慧能こそ達摩の正系であると出張した。

※23 懷州太行山……河南省沁陽県東北四〇里のところにある。

※24 稠禅师云々……この話は、『続高僧伝』卷一六の僧稠伝にある、「後詣懷州西王屋山、修習前法。聞阿虎交門、咆響振巖、乃以錫杖中解、各散而去。」(T10-515a)による。

※25 『金剛般若理鏡』一卷……注9を参照。

※26 見西虎鬪爭一鹿、云々……注24を参照。

※27 司戸尹玄度……司戸は司戸參軍の略称。唐代に各州に置かれた戸籍、賦税、倉庫などを司る官吏で、従八品(大州)或いは従九品(中・小の州)の下級官僚のこと。尹玄度については伝不詳。

※28 録事參軍鄭暹……録事參軍は府・州の役所の文書や帳簿を記録し管理して、善悪を取り締まる官のこと。鄭暹については伝不詳。

※29 漢水明珠之郡……柳田氏は陝西省寧羌州沔県の西部にあるとするが(柳田聖山『初期禪宗史書の研究』(柳田聖山集)第六卷、法藏館、二〇〇〇年、九一頁)、楊曾文氏は当時の金州(陝西省安康県の西北地方)を指すとする(楊曾文『淨覺及其『注般若心經』(附其校本)』『中華仏学學報』第六期、台湾中華仏学研究所、一九九三年、一四二頁)。

※30 『華嚴經』二云、「東方入正受、云々」……『華嚴經』賢首菩薩品の偈文。「或東方見入正受、或西方見三昧起、或西方見入正受、或東方見三昧起。」(19—438b)

※31 五蘊柱上……『智説疏』に、「乃為煩惱鎖、無明鎖、妄想鎖、名相鎖、貪瞋癡鎖、鎖諸衆生於五蘊柱、繞二十五有、循環六道、經歷三塗、恒受諸苦、不名自在。」とある。吉藏の『中觀論疏』に、「今因有則果。有因無則果無。寧得捲果於因。就捲指作既爾。人望五陰柱与四微万義皆類。」(142—110a)とある。

※32 四大五蔭……四大は、地・水・火・風、五蔭は、色・受・想・行・識を指す。

※33 『肇』云、「法無有無之相、云々」……僧肇の『涅槃無名論』妙存第七の文を逆にした引用。「聖無有無之知、則無心於内。法無有無之相、則無數於外。」(145—156c)

※34 『中論』云、「五蘊和合故、云々」……『中論』観邪見品の引用。「但五陰和合故、假名為我、無有決定。如椽椽和合有舍、離椽椽無別舍。」(130—38a)

淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の訳注研究(程)

※35 色如聚沫、云々……『雜阿含經』卷一〇に同様の偈文があり、「觀色如聚沫、受如水上泡、想如春時焰、諸行如芭蕉、諸識法如幻。」(21—68a)さらに、『五陰譬喻經』にも「沫聚喻於色、痛如水中泡、想譬熱時炎、行為若芭蕉、夫幻喻如識。」(21—501b)とある。

※36 淨明三昧……『摩訶般若波羅蜜經』卷五に「云何名淨明三昧、住是三昧、於諸三昧、得四無闇智。是名淨明三昧。」(18—262a)とある。

※37 四蛇共住……『大般涅槃經』卷三三、光明遍照高貴德王菩薩品第十三に、「譬如有人、以四毒蛇、盛之一篋、令人瞻養。……(中略)……菩薩摩訶薩、得聞受持大涅槃經。親身如篋、地・水・火・風、如四毒蛇。見毒触毒、氣毒醫毒。」(12—499b)とある。また『大智度論』卷二〇に、「如仏説毒蛇喻經中、有人得罪於王。王令掌護一篋。篋中有四毒蛇。王赦罪人、令看視養育。……(中略)……王者魔王、篋者人身、四毒蛇者四大。(以下略)」(25—147b)とある。

※38 無明窟宅……慧琳の『一切経音義』卷一に、「包含無量結使煩惱、陶鑄有情、命業生死、宛轉其中、不能出離、無明窟宅、如鳥居卵殼、故引為喻也。」(54—323c)とある。

※39 千年闇室……『大方等大集經』卷一に、「譬如一処百年闇室、一灯能破。」(13—4c)とあり、また禪宗系の偽經とされる『仏説法王經』に、「又如千年闇室、燃一炬灯、諸闇皆尽。」(185—1387b)とある。

※40 六賊……煩惱を生ぜしめるものとなる眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を賊にたとえたもの。

※41 『涅槃經』云、「肇作心師、云々」……『大般涅槃經』卷二八師子吼菩薩品の句の「願作心師、不師於心。」(112—534b)の「願」を「肇」に改めたもの。

※42 竜樹云、「即色以明空、云々」……竜樹の作品中に、同一の文章は

見出せないが、彼の著作である『天智度論』卷四二、釈集散品第九

に、「世尊、色空不名為色。離空亦無色。色即是空、空即是色。」

※43『大品』云、「即色是空、云々……この句は、『大品』ではなく、

『維摩經』卷中、入不二法門品第九の「色即是空、非色滅空、色性

自空。」(T14-551a)の引用である。

※44『安立諦……古藏の』三論玄義の「如撰大乘論師、非安立諦、不

著生死、不住涅槃、名之為中也。」(T45-14c)とあるが如く、生

死にも涅槃にも、住まらない中道を指す言葉。

※45『安心論』云、「過去仏説一切法、云々……ここでいう『安心論』

とは、達摩とその門下の語録である『二入四行論』(長卷子)を指

し、そこには、「故『仏藏經』云、過去仏説一切法畢竟空、未來仏

亦説一切法畢竟空。」(柳田聖山『初期の禪史』〈禪の語録2〉、筑

摩書房、一九七一年、二二六頁)とするが、その句の出典とされる

『仏藏經』浄法品第六では、「若有過去諸仏、説一切法、皆畢竟空。

無我無人無衆生無寿者無命者。舍利弗、未來諸仏、説一切法、亦畢

竟空。無我無人無衆生無寿者無命者。舍利弗、今現在十方恒河沙世

界諸仏、説一切法、亦畢竟空。無我無人無衆生無寿者無命者。舍利

弗、是名諸仏無上之法。」(T15-794b)とあり、浄覚は『仏藏經』

を参照したかもしれない。

※46空中尋鳥跡……全く同文は見出せないが、空中鳥跡の譬えは、多く

の經典に見られる。例えば『大般若經』卷四五の初分菩薩品第十二

之一には、「善現、如空中鳥跡句義。無所有不可得。菩薩句義。無

所有不可得亦如是。」(T5-265c)とあり、同卷四一にも、「善現

当知、譬如空中鳥跡句義、實無所有。菩薩句義、亦復如是。實無所

有。」(T1-57b)とある。さらに地婆訶羅訳の『大乘密嚴經』には、

「譬如虚空中、有鳥跡明現。亦如離於木、而火得熾然。空中鳥跡現、

離木而有火、我及諸世間、未曾見是事。」(T16-746)の偈文もあ

る。それらは、いずれも実ならざるもの譬えとされている。

※47『十二門論』云、「諸法不自生、云々……最初の四句は、『十二門

論』ではなく、同じく童樹の『中論』の「諸法不自生、亦不從他生、

不共不無因、是故知無生。」(T30-21b)の引用であり、次の四句は、

『十二門論』の「若縁所生法、是即無自性、若無自性者、云何有是

法?」(T30-159c)の引用。

※48無心……無分別、無執著のこと。無念などと同じように、初期禪宗

においては、最も重要な思想の一つである。

※49如人夢見明月宝珠、云々……これと同一の句は見あたらないが、

『大方等大集經』卷一、海慧菩薩品第五之四に、「善男子、譬如微

妙淨琉璃宝、雖復在泥、經歷百年、其性常淨、出已如本。菩薩摩訶

薩、亦復如是。了知心相、本性清淨、客塵煩惱之所障汚。而客煩惱、

實不能汚清淨之心。猶珠在泥、不為泥汚。」(T13-638a)とある。

また『経律異相』卷三には、「明月摩尼珠。」(T53-14a)という似

たような表現がある。

※50十地……『華嚴經』卷三三、十地品には、十地を「何等為十。一曰

歡喜、二曰離垢、三曰明、四曰焰、五曰難勝、六曰現前、七曰遠行、

八曰不動、九曰善慧、十曰法雲、是十地者。」(T9-526c~543a)

と説かれる。

※51六道……衆生が業によって生死を繰り返す六つの迷いの世界、ある

いは業によっておもむくところの生存状態で、地獄道、餓鬼道、畜

生道、修羅道、人間道、天道をいう。

※52萐若針花……萐若は、おめき草。毒草の一種で、それを飲むと、

目に幻覚を生じ、目の前に針状の花が顕われるという。

※53鏤水寛字、云々……不可得、乃至は無駄なことを譬える。鏤水につ

いては、桓寛の『塩鉄論』殊路第二に、「内無其實、而外学其文、

雖有賢師良友、若画脂鏤水、費日損功。」の文あり、その他に『北

史』卷八一の列伝第六九には、「然爰自始基、暨於季世、唯濟南之

在留官、性識聰敏、頗自砥礪、以成其美、自余多驕恣傲狠、動違礼度、日就月將、無聞焉爾。鏤水雕朽、迄用無成、蓋有由也。」の用例もある。画水については、『百喻経』卷一の乗船失釘喻に、「有人乗船渡海、失一銀釘墮於水中。即便思念、我今画水作記、捨之而去、後当取之。……(中略)……問言、於何処失。答言、初入海矣。又復問言、失経幾時。言、失来二月。問言、失来二月、云何此覓。答言、我失釘時、画水作記。本所画水、与此無異。是故覓之。……(下略)」(T4-545c)の用例がある。

※54『維摩経』云、「四大無主、云々。……『維摩経』上卷、文殊師利問疾品第五に、「四大合故、仮名為身。四大無主、身亦無我」(T14-545a)とある。

※55十二因縁……人間の苦惱がいかにして成立過程を考察し、その原因を追求して、十二の項目の系列を立てたもの。十二項目とは、無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死を指す。

※56識種……識は、第八識阿頼耶識のことで、識種とは、阿頼耶識に薫入した善悪の種子のこと。

※57神道……墓所にいたるまつすぐの一本道をいう。

※58中蘊……また中陰、中有ともいい、現世に死んでから、来世に生まれるまでの中間状態を指す。『大毘婆沙論』卷第七十に、「問、何故中有或名中有。答、居死有後、在生有前。二有中間、有自体起。欲色有撰、故名中有。」(T27-363a)とある。

※59『俱舍論』云、「六道四生、云々。……『俱舍論』では、この句と同一のものは見当たらないが、柳田氏はこれを『俱舍論』第八く第一〇の取意であると指摘している。(柳田聖山「初期禅宗史書の研究」(柳田聖山集)第六卷、法蔵館、二〇〇〇年、六一九頁)

※60『法華(経)』云、「無明縁行、云々。……『妙法蓮華経』卷三、化城喻品の句であり、「無明縁行、行縁識、識縁名色、名色縁六入、六入縁触、触縁受、受縁愛、愛縁取、取縁有、有縁生、生縁老死。」

(T9-25a)とある。

※61閑曠……静かであるとか、という意。『莊子』の「刻意」に、「就數決、処閑曠。」という用例もある。

※62心生三界生、云々……この句と同一のものは見出せないが、同じ意味の句が『大乘起信論』に、「是故一切法、如鏡中像、無体可得。唯心虚妄、以心生則種種法生、心滅則種種法滅故。(T32-577b)とある。

※63『維摩(経)』云、「欲得浄土、云々。……『維摩経』上卷、仏国品に「若菩薩欲得浄土、当浄其心。随其心浄、則仏土浄。」(T14-538c)とある。

※64縁覚……辟支仏、独覚ともいふ、十二因縁を観じて迷いを断ち、理法を悟るところから縁覚という。

※65四諦……仏教の基本的真理を説いたもので、苦諦、集諦、滅諦、道諦の四種からなる。

※66四禪八定……色界の四禪と無色界の四無色定のこと。色界の四禪とは、色界における四つの段階的境地で、初禪から四禪までである。無色界の四無色定とは、無色界における四つの段階的境地で、空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処の四つの禪定をいう。

※67声聞……仏の教えを聞き、長い時間修行した結果、阿羅漢の境地に到達した聖者のこと。

※68冲虚……雑念を去って心を空しくする、あるいは心を淡泊空虚にすること。『切経音義』卷二六には「冲、虚也。」とあり、この二文字が全く同意であることがわかる。「老子」の「大盈若冲」と同じ意味で、本来道教で用いられた言葉であるが、後に仏教でも用いられた。僧肇撰とされる『宝蔵論』には、「夫離者虚也、微者冲也。冲虚寂寞、故謂之離微。」(T45-146b)とある、さらに元康作の『肇論疏』巻下には、「冲而不改。字書云、冲虚也。涅槃之道、体性虚無、何所遷変。故云不改也。」(T45-193a)とある。

※69 渴逐陽炎、云々」……無駄なこと、無益なことに譬えていう。

『正法念処經』觀天品之二十一に、「樛栴如觸火、畢竟不得栴、如鹿患渴故、隨逐陽炎走、畢竟不除渴、此栴亦如是」(T17-251a)とあり。『楞伽經』卷二にも、「譬如群鹿、為渴所逼。見春時炎、而作水想。迷亂馳趣、不知非水。(T16-491a)とある。

※70 画餅充飢、説食為飽……有名無実、また無駄なことを譬えていう。『画餅充飢』については、「三国志」の「魏志・盧毓伝」に、「選挙莫取有名、名如画地作餅、不可啖也」とある。「説食為飽」については、禅宗系の偽經とされる「仏説法句經」に、「善男子、若名字是有、説食与人、心得無飽。若得無飽、一切飲食、則無所用。何以故、説食尋飽不須食故。」(T85-1432c)とあり、またその注釈書である「法句經疏」に、「若有而為実者、直説食名聞便已足、何待進而方飽。故云説食与人、心得充飽也。」(T85-1437b)とある。さらに浄覚の『楞伽師資記』に、「画餅尚未堪食、説食与人、焉能使飽。」(柳田聖山『初期の禅史』〈禅の語録〉、筑摩書房、一九七一年、一四七頁)とある。

※71 虚空三昧……仏教で説く三昧の一つで、例えば『大般涅槃經』卷三六、陳如品下に、「四万五千菩薩得虚空三昧。是虚空三昧亦名广大三昧。亦名智印三昧。」(T13-662a)とあり、また『大法炬陀羅尼經』卷二、問法性品第五にも、「無畏、如來亦爾、無言無對、無染無著、離諸障礙。如此言説、即是入於虚空三昧。無畏、譬如涅槃、本性寂靜、假以無量言辭演説、求其体相、了不可得。」(T21-667c)とある。

※72 羊車・鹿車・大牛之車……『法華經』卷二、譬喻品第三に説かれた三車一車の譬えによるもの。

※73 菩提賢帝薩埵……天台大師智顛の『菩薩戒義疏』卷上に、「天竺梵音、摩訶菩提賢帝薩埵、今言菩薩、略其余字。訳云、大道心成衆生。」(T10-563a)とある。そのほかに、元照述とされる「觀無量

寿仏經義疏」の中にも、次の句がある、「菩薩、梵云摩訶菩提賢帝薩埵、此云大道心成衆生。雖名含大小、行有淺深、今此同聞、莫非補処。」(T37-287a)とある。

※74 大象無形、云々……『老子』第四章を典とする句、「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。不笑、不足以爲道。故建言有之、明道若昧、進道若退、夷道若類、上德若谷、大白若辱、玄德若不足、建德若偷、質真若渝、大方無隅、大器晚成、大音希声、大象無形、道隱無名。夫唯道、善貸且善。」

※75 維摩經云、「達諸法相無罣礙、云々」……『維摩經』上卷、仏国品にある偈文。「達諸法相無罣礙。稽首如空無所依。」(T14-538a)

※76 賢護云、「心有想念、云々」……『大方等大集經』賢護分思惟品第一之二の偈文。「心有想念、則成生死。心無想念、即是涅槃。」(T13-877b)

※77 蠅螟小虫、云々……小虫の名。蚊のまゆげに巢をつくるという。『抱朴子』の博喻に、「蠅螟之巢、無乘風之羽。」ともいう。さらしく刺驢に、「蠅螟屯蚊眉之中、而笑弥天之大鹏。」とあり、また同じ化成、「広弘明集」卷二九の統婦篇第十上に、「感四气之交易、万物之化、受天和而異命、稟地德而齊衆。察蠅螟於蚊眉、觀昆鷲於北溟、俱含識而異見、同有色而殊形。」(T52-337b)とある。

※78 普現色身三昧……吉藏の『法華義疏』卷二、妙音菩薩品第二四に、「問、無生法忍、普現色身法華三昧、有何異耶。答、心無所依、猶如虚空。不生心動念、故名無生法忍。雖空而有、縱任自在、処処現身、即是普現色身三昧。三一開會、無所染著、即法華三昧也。」(T34-623c)とある。

※79 捨生死外覓菩提、云々……無駄なことの譬え。『統高僧伝』卷一六の慧可章に、「影由形起、響逐声来。弄影劳形、不知形之是影。揚声止響、不識声是響根。除煩惱而求涅槃者、喻去形而覓影。離衆生



而求仏、喩黙声而尋響。」(T150—523b)とある。また『莊子』雜篇の漁父第三二には、「人有畏影惡跡而去之走者、举足愈數而跡愈多、走愈疾而影不離身、自以為尚遲、疾走不休、絕力而死。不知處陰以休影、処靜以息跡、愚亦甚矣。」とある。

※80 落天魔・神鬼法、云々……淨覺の『楞伽師資記』に、「或墜小乘二乘法、或墜九十五種外道法。或墜鬼神禪。觀見一切物。知他人家好惡事。苦哉。」(T38—284a)とある。

※81 落外道一・異、俱・不俱邪見法……邪見に陥ること。『楞伽經』卷二に「爾時大慧菩薩摩訶薩、復白仏言、世尊、唯願為説、離有・無、一・異、俱・不俱、非有・非無、常・無常。一切外道所不行、自覺聖智所行。(下略)」(T16—90c)のある大慧菩薩の問いに對し、釈尊がそれらは邪見として退けた。

※82 迷猿捉水月、云々……水に映っている月の影を捉えようとする猿、雷に吠える犬。いずれも美ならざるものを実有と執着する譬え。『大般涅槃經』卷九の如來性品第四之六に、「如獼猴捉水中月。」(T12—418c)とあり、『摩訶止観』卷五之上に、「如渴鹿逐炎、狂狗齧雷、何有得理。縱令解悟小乘、終非大道。」(T16—52a)とある。

※83 『楞伽(經)』云、「先聖所知、云々」……『楞伽經』卷二の句。「仏告大慧。前聖所知、転相伝授。」(T16—197b)

※84 禅偈云、「捨木横無火、云々」……禅偈の出所は不明であるが、如離訶羅識の『大乘密嚴經』には、「譬如虚空中、有鳥跡明現。亦如離於木、而火得熾然。空中鳥跡現、離木而有火、我及諸世間、未曾見是事。」(T16—744c)とある。「空中鳥跡」と同じく、あり得ないものの譬え。

※85 杜正倫碑云、「真如性淨、云々」……杜正倫(五八七—六五八)の伝記は、『旧唐書』卷七〇の列伝第二〇、『新唐書』卷一〇六の列伝第三〇にある。杜正倫は唐の太宗朝に中書令(宰相に相当する官位)

淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の訳注研究(程)

の位についた高級役人であった。さらに柳田氏によれば、杜氏は南山道宣や法冲なども相知であったという。(柳田聖山『初期禅宗史書の研究』(柳田聖山集 第六卷、法藏館、二〇〇〇年、八三頁)ここで、淨覺が引用した碑文については、まずP三五五九の『導凡趣聖悟解脱宗修心要論』の末尾に、「初菩提達摩、以此学伝慧可、慧可伝僧璨、僧璨伝道信、道信(伝)大師弘忍、弘忍伝法如、法如伝弟子道秀等。是道信有杜正倫作碑文。此文忍師弟子承所聞伝」という表現がある。これによれば、杜正倫が道信のために碑文を作つたようである。さらに『伝法宝紀』道信章にも、「後三年四月八日、石戸自開、容貌儼如生日。門人遂加漆布、更不敢閉、刊石勒碑、中書令杜正倫撰文頌徳。」(柳田聖山前掲書、五九六頁)がある。ただし、その所在が不明である。

※86 『疏』云、「法身清淨、云々」……いずれの經の『疏』によつたのかは不明であるが、「水中月」の譬えは、他の仏經にもみられ、例えば支謙訳『維摩經』卷下、觀人物品第七に、「譬如達士見水中月、菩薩觀人物為若此。」(T14—528a)とある。

※87 以榻出榻、云々……楔と同意で、物の間隙に、差し込んでその間隙を補つもの。ここでは本末顛倒、不可能の譬え。『楞伽經』卷二に「如逆掘出榻、捨離貪猥受。」(T16—919b)とあり、また淨覺の『楞伽師資記』に、「雖欲去其前塞、翻令後榻弥堅。」(柳田聖山『初期の禅史』(禪の語録2)、筑摩書房、一九七一年、一四七頁)とある。

※88 得魚忘筌、云々……魚を得たならば、筌は無用であり、兔を得たならば、蹄は無用であり、真意を得たならば、言葉は無用であるという意。『莊子』雜篇の外物第二六に、「筌者所以在魚、得魚而忘筌。蹄者所以在兔、得兔而忘蹄。言者所以在意、得意而忘言。」といい、『梁高僧伝』卷七の竺道生伝に、「夫象以尽意、得意则象忘。言以註理、入理则言息。自經典東流、訳人重阻。多守滯文、鮮見円義。若

忘筌取魚、始可与言道矣。」(150—366c)とあり、さらに、神秀の「觀心論」にも、「故知念在於心、不在於言。因筌求魚、得魚忘筌、因言求意、得意忘言。」(田中良昭「菩薩惣持法」と「觀心論」(二))  
 『駒澤大学仏教学部研究紀要』第四四号、一九八六年、六二頁)とある。

※89 布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧……大乘仏教において菩薩の実践すべき六種の徳目で、六度ともいう。布施は、与えること。持戒は、戒律を守ること。忍辱は、苦難に堪え忍ぶこと。精進は、たゆまず努力すること。禪定は、精神を統一し安定させること。智慧は、真実の智慧を得ることをいう。

※90 行六波羅蜜、云々……般若の空の立場に立って、六度を行すべきを説いたもの。達摩の「二入四行」の称法行に「為除妄想、修行六度、而無所行、是為称法行。」(柳田聖山『達摩の語録』(禪の語録1)筑摩書房、一九七九年、三二頁)とある。

※91 『勝天王經』云、「総持無文字、云々」……『勝天王般若波羅蜜多經』卷六、現化品十一の偈の「総持無文字、文字顯総持、般若大悲力、離言文字説」(18—20c)の引用。

※92 最上法身……大乘では究極・絶対の存在に名づけ、一切の存在はそれのあらわれである、と説くが、ここでは、真理そのものを指す。

※93 三賢……『華嚴經』に説く菩薩の五十二の修行階位における賢聖の区別を示す呼称。三賢とは、菩薩の五十二階位のうち、第十一から第二十までの十住、第二十一から第三十までの十行、第三十一から第四十までの十回向の段階にある菩薩をいう。十聖とは、第四十一から第五十までの十地(注50を参照)の菩薩を指す。

※94 比量……現量・比量・聖數量の三量(三つの認識方法)の一つで、われわれが一つの事象によって他の事象を正しく推知すること。

※95 動念即魔網、云々……『大智度論』卷八の偈に、「有念墮魔網、無念則得出。心動故非道、不動是法印。」(125—118a)とある。

※96 養神……智慧をもって精神を養う。『莊子』外篇の刻意第一五に、「故曰、純粹而不雜、靜一而不変、愜而無為、動而以天行、此養神之道也。」とある。

※97 道流……道を求める者たち。流は、徒・仲間之意。

※98 迷時三界有、云々……中国国家図書館所蔵の敦煌写本(北八四二二号)の末尾の「僧と女人の問答」中に、「女人答曰、『文字本解脫、無非是般若、心外見迷人、知君是迷者。迷則三界有、悟則十方空、本自無南北、何処覓西東。』」とある。

※99 会是……必ず、確実にそういうことになるの意。

※100 馳騁……奔走する、駆け回ること。

※101 光範……伝未詳。沈亜之撰「靈光寺僧靈祐塔銘」に、「(前略)律師光範者、始為童子時、事師曰靈祐。(後略)」(『全唐文新編』卷七三八)とあるが、その詳細は不明である。

※102 真詮……真理を書き頭わした注釈、すなわち、『淨覺注』を指す。

※103 滑汭……地名。柳田聖山氏は「安徽省廬州府の東境」(柳田聖山『初期禪宗史書の研究』(柳田聖山集)第六卷、法蔵館、二〇〇〇年、六二四頁)とするが、楊曾文氏は、白馬(滑台)とする。(楊曾文前掲論文、二五一一—二五二頁)。

※104 頂荷……ありがたく頂戴する意。

※105 二執……二種類の誤った考えのこと。常一主宰のアートマンが存在すると執着する我執(人執)と、諸もろのダルマに実体があると執着する法執をいう。

※106 三空……空・無相・無願の三解脱門をいう。